

平成 29 年度第 2 回小牧市在宅医療・介護連携推進協議会 議事録

日 時	平成 29 年 11 月 16 日（木） 15 時 00 分～16 時 30 分
場 所	小牧市役所 東庁舎 4 階 本会議用控室
出 席 者	【委員】（名簿順・敬称略） 浅井 真嗣 小牧市医師会 在宅医療推進委員会委員長 磯村 千鶴子 在宅医療サポートセンター分室 芥川 篤史 医療法人純正会 小牧第一病院副院長 渡邊 紘章 小牧市民病院緩和ケアセンター部長 菅沢 由美子 小牧市民病院地域連携室副主幹 大野 充敏 小牧市介護支援専門員連絡協議会副会長 伊藤 里美 小牧市介護保険サービス事業者連絡会会長 志津 志帆 小牧市介護保険サービス事業者連絡会訪問看護部会幹事 田中 秀治 小牧市社会福祉協議会地域福祉課長 三嶋 直美 南部地域包括支援センター 四宮 貴美子 小牧地域包括支援センター 宮越 晴美 味岡地域包括支援センター 瀬口 幸恵 篠岡地域包括支援センター 岡田 江里子 北里地域包括支援センター 山本 格史 長寿・障がい福祉課長 松永 祥司 介護保険課長 船橋 嘉成 保健センター所長 江口 幸全 地域包括ケア推進課長 大橋 弘育 (有)ウィルケア小牧代表取締役 【代理出席】 星野 博史 小牧市歯科医師会 浅井 宏昭 小牧市薬剤師会 大寫 誠 春日井保健所（小牧分室長） 【欠席委員】 小島 英嗣 小牧市市民病院副院長兼地域連携室室長 【事務局】 山田 祥之 市長公室地域協働担当部長 兼 健康福祉部 地域福祉担当部長 倉知 佐百合 健康福祉部 地域包括ケア推進課地域支援係長 岩下 貴洋 健康福祉部 地域包括ケア推進課地域支援係 若山 愛美 健康福祉部 地域包括ケア推進課地域支援係
傍 聴 者	0 名
配付資料	次第 資料 1 こまきつながるくん連絡帳の現状について 資料 2 進捗状況報告シート 資料 3 平成 29 年度 実施事業の報告と今後の予定 参考資料 わた史ノートの普及啓発に関するアンケート調査結果

主な内容

1. 開会

- ・あいさつ

2. こまきつながるくん連絡帳の現状について

- ・事務局より、資料1：こまきつながるくん連絡帳の現状についてを用いて、説明。
- ・質疑なし。

3. これまでの課題の進捗状況について

- ・資料2：進捗状況報告シートを用いて、各委員より説明。

（ア）地域の医療・介護の資源把握

（1）歯科医の訪問歯科診療の実施状況などについて

歯科医師会：星野氏）

- ・訪問歯科診療の対応表については、平成29年7月版は完成し、医師会、薬剤師会に配布した。
- ・介護サービス事業者連絡会を通してケアマネ、介護事業所等にも配布予定である。
- ・対応表と各医院のホームページ、歯科医師会ホームページの医院情報との不一致については、確認し、順次修正している。
- ・人材関連については、衛生士会との話し合い、情報交換は継続している。人材養成は難しいが、研修会の情報を共有し、各々のレベルアップを試みている。
- ・人材バンクは理想であるが、難しい状況である。

（ア）地域の医療・介護の資源把握

（2）薬剤師の訪問薬剤管理指導の実施状況などについて

薬剤師会：浅井氏）

- ・県の指定の条件が厳しくなり、24時間対応できる薬局について、12から8に減っている。
- ・会の中では、在宅に関する委員会を立ち上げ、少しずつ広がりを見せているところではあるが、24時間対応のハードルが高く難しいとされる薬局が多い。
- ・配布したリストが、現在の対応可能な薬局一覧である。
- ・この部分をどのように広げていくかが、今後の課題である。

浅井会長）

- ・どこが厳しくなったのか。

薬剤師会：浅井氏）

- ・満たすべき施設基準のハードルがあり、保険薬局としての機能強化という項目が、非常に高くなり、満たせなくなった薬局が出てきた。
- ・その施設基準の項目の一つとして、24時間対応があったので、セットで対応するとしていた薬局が、他の基準を満たせなくなったことにより、手を下げてしまった形になる。

（ア）地域の医療・介護の資源把握

（3）各介護保険サービス事業所についての情報共有について

伊藤委員）

- ・本日、事業所一覧のダイジェスト版を配布させていただいた。
- ・昨年の7月からは、事業所一覧の冊子版に医療対応の情報を加えた形で作成している。
- ・こちらは、毎年1回、各事業所に内容の確認をしていただき、使っていただけるような情報を盛り込むように作成、配布をしている。
- ・今年度は予算が足りていないため、配布できていないが、来年度以降、医療関係者への配布についても検討していきたい。

- ・ 医療と介護の連携に向けて、事業者連絡会では毎年、各部会で研修等を行っている。
- ・ その中で、昨年からある部会では、口腔ケア、脱水症状など、医療・介護の双方に必要な研修等を開催している。

（カ）医療・介護関係者の研修

（４）研修について

磯村委員）

- ・ 「医師とあゆむ勉強会」を医師の参加も目的に開催している。
- ・ その中で、２ヶ月に１回、救急救命士による救急車を呼ぶということなどをはじめ、研修を開催している。
- ・ １２月には、皮膚排泄ケア認定看護師、２月には訪問看護師・摂食嚥下サポートチーム立ち上げと講習会を予定しているところである。
- ・ 平成３０年４月以降については、まだ決まっておらず、今後の話し合いになる。
- ・ 医師と各関係機関との意見交換会を実施したが、今後に向けて有意義だったと思われ、今後も続けていければと思っている。
- ・ 在宅医療に関してのアンケート調査結果については、この後、開催するサポートセンター運営会議において、報告させていただく。
- ・ 医師会にて副科（耳鼻咽喉科、眼科に限る）の紹介マニュアルを作成した。こちらについては、今後も継続し、問題があれば、その都度、話し合いをしたい。
- ・ 在宅医療を行うにあたり訪問看護の必要性は高まっている状況であり、情報提供し、連携を強化したいと考えている。
- ・ 訪問診療している医療機関の連携が難しい状況ではあるが、少しずつ紹介していけるようなマニュアルを作成したいと考えている。
- ・ クリニック医師のさらなる訪問診療依頼は課題が多い状況である。訪問看護ステーションや多職種とのさらなる関わりの強化をするなど、切れ目のない在宅医療提供体制に繋げることも必要であると思われる。
- ・ 研修会については、医師の参加の増加と、関係機関の研修会、勉強会が重ならないための対策が課題であり、関係機関と、研修開催日、内容等について話し合いたいと思っている。

浅井会長）

- ・ 在宅医療の主治医をどうやって依頼するかということが一番の課題である。
- ・ 眼科、耳鼻科については、どちらかという単発で行っていただき、終わりということもあるが、主治医となると、その方の状態、医療器具など多岐にわたり、また、看取りまでやるのかどうなのかなど、いろいろなことがあるため、どのように分けて、どこで依頼をするなど、画一的に出来るかどうかなどについて考えているところである。
- ・ 平成３０年３月までには、ある程度のものを作りたいと思っている。

大野委員）

- ・ 今年も１０月１１日に「訪問看護とケアマネの合同研修会」を開催した。５２名が参加し、そのうち、９名の方が訪問看護師であった。
- ・ 今後、更に医療依存度の高い在宅療養者が増加してくるなかで、訪問看護師とケアマネとの情報共有は大変重要ではないかと考える。
- ・ また、ケアマネからすると、訪問看護の役割を改めて理解するためにも、定期的な合同研修会開催が必要ではないかと考えている。
- ・ 「薬剤師とケアマネの座談会」を１１月３０日に初めて開催する予定をしている。

- ・ ケアマネとしては、多職種の方と研修会を開催することも必要であるが、それぞれの専門職の方と膝を突き合わせて話し合いをすることが必要であると考えており、薬剤師さんとの座談会を開催する。

浅井会長)

- ・ 看護師の参加が悪い状況であるが、対策として何か思い浮かぶものはあるか。

志津委員)

- ・ 各事業所でいろいろな対策をしているようであるが、なかなか難しい状況である。

浅井会長)

- ・ かなり前から、こういった研修には、出るものだということを言っている。
- ・ 参加意識を高めることが必要である。

田中委員)

- ・ ケアマネの会のホームページに今年度についても、スケジュールを掲載している。
- ・ 今年度については、日程が重なったなどの報告は入っておらず、順調に活用されているものだと考えているが、件数として、どの程度、利用されているかについては、不明である。
- ・ 前回もお伝えしたが、一団体のホームページでの掲載でよいかなどについては、課題であるとする。
- ・ 医療と介護の連携については、非常にたくさんのことをやっている状況であるため、今後は、こういったことを、インターネットを活用して外部へアピールするということも必要ではないかと思っている。

(キ) 地域住民への普及啓発

(5) わた史ノートの普及・啓発について

江口委員)

- ・ わた史ノートの普及・啓発について、現状としては、平成 29 年 4 月から南部地区に地域包括支援センターが開設したことを踏まえ、その部分を修正し、5,000 冊増刷し、市役所の窓口、地域包括支援センターにおいて配布しているところである。
- ・ 市の広報に、わた史ノートの啓発記事を掲載したこともあり、年度当初は、「欲しい」といった問合せをいただいたところであった。
- ・ 今後の予定としては、来年度から、わた史ノートの普及啓発を目的とし、市の出前講座の行政編に新たなメニューとして追加をし、地域包括支援センターの職員にご協力をいただきながら、普及・啓発を図ってまいりたいと考えている。
- ・ その普及啓発に向けては、渡邊先生をはじめ、小牧市民病院にご協力いただき、改めて、わた史ノートについての講義を行っていただくとともに、2 月の寿学園でわた史ノートに関する講演をしていただけることになっており、そちらに市職員や地域包括支援センター職員も参加させていただき、勉強させていただきたいと思っているところである。
- ・ (参考資料) わた史ノートの普及啓発に関するアンケート調査結果を用いて、結果報告。
- ・ また、市出前講座の市民サークル・企業編として、葬儀会社「シオン」が『終活講座』を開始し、その際に、わた史ノートを活用したいとの声が寄せられた。
- ・ 実際には、使っていないが、市民の方から問合せが寄せられたところである。
- ・ わた史ノートをより多くの方に知っていただくためには効果的である一方で、本市のわた史ノートを作成した背景などが理解されないまま活用されてしまう可能性があり、疑問もあるところである。
- ・ そのため、来年度からは、市の出前講座のメニューに加え、普及啓発をしていきたいと考えている。

渡邊委員)

- ・ 昨年度、民生委員・児童委員の会議にまわらせていただいた。
- ・ このアンケート結果で分かったこととしては、民生委員・児童委員の方が、独居世帯の相談窓口になっているということ、生きがいや社会的孤立というところの相談まで受けているということが分かった。
- ・ わたしノートを満遍なく広く、普及啓発するのは労力もいると思われ、ある程度、ターゲットを絞り、有効に活用される方に絞って啓発する必要があるのではないかと考えている。
- ・ 今後は、「使ってもらおう」ところまで行くのが必要だと考え、出前講座などを考えてもらっているので、市と協力して進めていければと思う。

大橋委員)

- ・ わたしノートを「シオン」が活用することについて、問題があることから、市の出前講座を立ち上げるとの趣旨の説明があった。
- ・ 広く市民の方に、こういったものがあることを普及啓発する意味では、行政として、「この部分は少しどうか…」という理由だけで無くしてしまうのはどうかと思う。

江口委員)

- ・ 「シオン」の講座は無くなるわけではなく、終活講座は継続されることになる。
- ・ そのうえで、行政編ということで、新たにメニューを追加する予定である。

(ウ) 切れ目のない在宅医療と在宅介護の提供体制の構築推進

(6) 療法士の取り組みについて

大橋委員)

- ・ 膝腰スッキリ体操については、出前講座の行政編の中で、保健センターからの依頼で、本日も実施し、計 14 回となった。
- ・ これまでは、各事業所に連絡をいただいたが、今回は連絡会に話があり、身障意見交換会に参加した。
- ・ 小牧市版介護予防リーダーについては、元々、愛知県でリーダー養成講座が行われていたが、今年度からは、小牧市独自の講座を行うということで、養成研修に講師として参加した。
- ・ 10 月 26 日に在宅医療・介護連携研修会で発表する機会をいただき、発表させていただいた。
- ・ 今後の予定としては、来年度の 3 月までに膝腰スッキリ体操を 4 回、来月、寿学園において、講演の機会をいただいている。
- ・ つどいの場立ち上げの手伝いということで、5 回コースで、その立ち上げ支援のお手伝いをさせていただく予定である。
- ・ 他の自治体において、それぞれの地域の体操が作られており、小牧市でも小牧版の介護予防体操を構築したいとの話を受け、「こまき山体操」を作成中である。
- ・ 介護支援専門員向け講演の依頼を受けており、現在、検討中である。
- ・ 参考であるが、愛知県内の理学療法士、作業療法士、言語聴覚士の 3 士会で、情報センターが設置された。
- ・ 69 市町村のうち、55 の市町村で、窓口が設置された。小牧市では、連絡会が窓口になっている。
- ・ 55 の窓口が設置されているなかで、28 においてネットワークが構築されている状況である。
- ・ 全国的に、リハビリの関係者は介護予防の推進に向けて、ネットワークを構築し、何らかの関わりを持って行こうと 3 士会でも推進されているところである。
- ・ インターネットでも検索可能であり、何かの折にご覧いただければと思う。

(エ) 医療・介護関係者の情報共有の支援

(7) 病院とケアマネジャーの連携について

田中委員)

- ・ 8月28日に病院と在宅の連携を考える研修会を実施し、66名が参加した。
- ・ 市民病院、第一病院にご協力いただき、介護サービス事業者や包括が参加し、連携を考える機会となっている。
- ・ 昨年の研修から医療と介護の連携シートを連携ツールとして提案をさせていただき、その使い方をレクチャーいただき、1年が経過した中で、どの程度、活用されたか、どのような課題があったかなどの情報交換を行った。
- ・ ICTが導入されることもあり、地域包括ケア推進課からICTについて案内をいただいた。
- ・ 今後、連携シートやICTなど、情報交換を行うツールが出てきており、どのような連携がより有効なのかの話し合いをしなければならないと思っている。

菅沢委員)

- ・ 昨年度に引き続き、2回目の開催となった。
- ・ あまり時間がなかったため、交流までは出来なかったが、連携シートの活用について一緒に考えることが出来たのは、非常に良い機会であった。
- ・ 連携シートの活用状況について、資料では、81件となっているが、10月で100件を越えており、1月10件のペースで活用されている状況である。
- ・ 病院としては、在宅での情報を提供していただけることがありがたいと思うが、ケアマネの業務から考えるとあまり無理も言えない部分もあり、ICTをどのように活用するか検討していきたいと考えている。

(エ) 医療・介護関係者の情報共有の支援

(8) ICTの構築について

江口委員)

- ・ ICTの現状については、議題2で資料1に基づき、説明したとおりである。
- ・ 実施に向けて、基盤は整備させていただいたが、支援の質の向上に向けても、1例でも多く、活用されるようルールづくりが必要だと考えている。
- ・ そのためにも、1例でも多く、事例を積み上げていきたいと考えている。
- ・ 今回導入した「こまきつながるくん連絡帳」については、愛知県内で45の自治体が導入、導入予定であるシステムであるが、今後は、自治体間の連携について検討する必要があると考えている。
- ・ スケジュールの管理に関するお話もあったが、導入したシステム内で、スケジュール管理も可能であると聞いているので、皆様のご意見をお聞きしながら、ICTの有効な活用という視点でも前向きに検討していきたいと考えている。
- ・ 歯科医師会の高木委員よりご連絡いただき、改めて会員に対し、ICTの登録を促すような働きかけをしていただけるとのことであり、皆様方にもご協力をお願いしたい。

浅井会長)

- ・ ICTについて、まだまだ、知らない機能がたくさんあるようである。
- ・ 小牧市の場合は、出だしが遅い状況ではあるが、遅いからといって他が凄いことをやっているかという、まだまだのところも多い。
- ・ 登録数が少ない状況であり、この部分を何とかしなければならないと思っている。
- ・ 登録しろといってもなかなか無理である。まずは使っていくために登録を促し、上手くいかどうかは分からないが、やっていき、後で考えながら進めていく形になると思っている。

大野委員)

- ・ ケアマネとしては、来週に役員会を開催する。
- ・ 現状として、事例での活用がされていない状況にあると聞いているため、どのように使っているのかを話し合いたいと思っている。
- ・ ほとんどの場合、ケアマネが始めの利用者入力をしていくことになると思っている。
- ・ 何かきっかけではないが、名指しで何ケースか実際に使ってもらえるように働きかけをしていけないか、また、こういったケースであればICTを使えるよねといったことを会員にお示しできるよう一度、話し合いたいと思っている。

浅井会長)

- ・ 地域包括支援センターのほうで、何か考えていることはあるか。
- ・ 事実上、ケアマネか包括が、きっかけとなると思っている。
- ・ もし無いようであれば、本協議会は今年度末にもう一度開催されることになっている。
- ・ それまでに、各包括1例ずつ、ケアマネは1事業所1例の10例程度実施し、市で進捗管理してもらいたい。
- ・ 内容としては、医療職（病院、診療所、歯科、薬局、訪問看護）を含めた3箇所以上と連携している事例とし、最低、2～3週間程度、動かしてもらいたい。
- ・ 遅くとも年末までをお願いしたい。

4. その他

○ 平成29年度 実施事業の報告と今後の予定

江口委員)

- ・ 資料3：平成29年度 実施事業の報告と今後の予定に基づき、説明。

○ 小牧市における在宅医療を取り巻く状況と在宅医療・介護連携の進め方

- ・ 事務局より、状況及び考え方について説明。

渡邊委員)

- ・ 死亡者統計のデータは非常に重要である。
- ・ 死亡数について、65歳以上に限定されている。
- ・ 40歳以上で、介護保険でカバーされている方や、カバーされていない方、また、がんや脳腫瘍を患った方には、それぞれに応じた特別な支援体制が必要だということが注目されてきている。
- ・ 在宅医療を進めていくにあたっては、個別性が重要になってくるため、統計の取り方を広げていただく必要があると考える。

浅井会長)

- ・ 在宅医療の推進には、医師を中心に持っていくのは難しいと思っており、ケアマネと訪問看護が連携して中心になって進めていくことが重要だと思う。
- ・ 実際、在宅医療をやっていて、医師が出て行くよりも、慣れた看護師が訪問すると7、8割のことは何とかなっていると思っている。

【閉会】